

『逍遙遺稿』札記

——張滋昉補遺——

前稿「『逍遙遺稿』札記——シルレルとシヨオペンハウエルのこと及び張滋昉について」（『椋山女学園大学研究論集』第三十三号人文科学篇、二〇〇二年三月）に於いて、『逍遙遺稿』に序文を寄せた文科大學漢学科の支那語講師、張滋昉（一八三九～一九〇〇）のことを取り上げ、清国漫遊中の副島種臣との出会いとそれに続く明治十二年（一八七九）の来日から三十二年（一八九九）七月に帰国し翌年十一月上海で客死するに至る間の事跡の一端を探ったが、その後、幾つかの資料にその名を見い出した。断片的で脈絡のない心覚えのメモ書きながら、とりあえず今回、知り得たことを以下に記しておきたい。

「新文詩」

明治十三年（一八八〇）三月、森春濤（当時六十二歳）が主宰する漢詩雑誌「新文詩」第六十集に、川田甕江（五十歳）の「清客張滋昉に訪はる。賦して贈る」と題された一首とそれに次韻した張滋

昉、長三洲（四十七歳）、中村敬宇（四十八歳）の諸作が載せられている。

清客張滋昉見訪賦贈 甕江漁史剛

汎交来往厭紛紛 汎交来往 紛紛を厭ふ

海外知音喜値君 海外の知音 君に値ふを喜ぶ

頼有毛錐代唇舌 頼さいはろに毛錐の唇舌に代はる有り

一樽相對細論文 一樽相對して細かに文を論ぜん

〈毛錐〉は、筆のこと。結句は、杜甫の「春日李白を憶ふ」詩の

「何いづの時か一樽の酒、重ねて与ともに細かに文を論ぜん」に基づく。

次韻 滋昉張滋昉

玉堂艸詔事紛紛 玉堂詔を草す事紛紛

巨筆如椽却羨君 巨筆椽たいさきの如く却って君を羨む

幾卷才人詩讀罷 幾卷才人の詩を読み罷り

始知滄海有奇文 始めて知る滄海に奇文有るを

〈玉堂〉は、漢代、詔の下るのを待つ者が待機した官署。〈巨筆〉は、

堂々としたりっぱな文章。東晋の王珣は夢の中で椽のような大きな

二 宮 俊 博*

筆を授けられ、天子が崩御したとき、哀冊文を草したという（『晋書』王珣伝）。〈滄海〉は、東海の意で、わが国を指す。

次 韻

三洲植客^芑

不關中外事紛紛 中外事紛紛たるに關せず
半日清閑喜値君 半日の清閑 君に値ふを喜ぶ
何問東西言語異 何ぞ問はん東西言語異なるを
心心相印是同文 心心相印す是れ同文
〈心心相印〉は、禪語で、言わず語らずして心が互いにぴったり合うこと。

次 韻

敬字主人正直

勿嫌詩醺醉紛紛 嫌ふ勿れ詩醺醉紛紛たるを
今日上賓原屬君 今日の上賓 原と君に属す
畢竟二邦兄弟似 畢竟二邦兄弟のごと似たり
欸談不用事儀文 欸談用ひず儀文を事とするを

春濤が「応酬の作は、名手と雖も一卒字を免れず。姑く一時の佳話を記すのみ」と評するごとく、いずれもそれ自体は格別言う程のこともない内容の詩であって、そのせいか明治四十二年（一九〇九）刊の『三洲居士集』や大正十五年（一九二六）刊の『敬字詩集』には収められていない（蘆江の文集は刊行されていない）が、修史館一等編集官・学士院会員の川田蘆江のもとに刺を通じ、陪席した元編集官の長三洲や学士院会員の中村敬字らと応酬唱和し、さらにそれが当時の有力な漢詩雑誌の一つである「新文詩」に掲載されたのは、何ら官銜を持たぬ一介の布衣に過ぎず、まだ東京にやって来てさほど間もない張滋昉にとっては、漢詩壇や文界にその名を知られる一つの契機となったことであろう。おそらく蘆江にもそうした紹介の意図があつて、「新文詩」上に唱和の作を披露したものと思わ

れる。もつとも、それに張滋昉の名が見えるのは、この一回きりで、その後、どうやら積極的に自ら関わりを求めたり、また求められたりしたわけではないようだ。

「會餘録」

明治十六年（一八八三）一月に興亜会は亜細亜協会と改称され、二十一年（一八八八）八月、「會餘録」が発行された。これは漢文で記した「亜細亜各国の古今の逸事遺聞、民情風俗」や会員の「詩文雜説」を輯録紹介した史料集で、仁礼敬之が編集にあたり、二十六年（一八九三）三月の第十五集までは確認されているが、それ以後は日清戦争のため続刊されなかつたと云われている（以上、一九七七年に開明書院から出た復刻版『會餘録』に附された末松保和氏の解題および一九九三年に不二出版から刊行された復刻版『興亜会・亜細亜協会』解説(1)、黒木彬文氏の「興亜会・亜細亜協会の活動と思想」参照）。

興亜会の設立以来同盟員として加わっていた張滋昉も、この「會餘録」にその詩文を幾つか寄せている。明治二十二年二月発行の第四集には、その編になる「水土雜輯」および「丸岡知事莞爾の任に沖繩に之くを送る」詩が、同年十一月発行の第六集「會餘酬唱」には、「大島公使の任に中国に之くを錢す」詩が、二十三年十月発行の第九集「會餘酬唱」には、「朝鮮金東農星使、將に国に帰らんとす。紅葉館席上、此を賦して別れに贈る」詩および「渡邊浩堂星使大人、將に澳京に之かんとす。同人紅葉館に公錢す。此を賦して別れに贈る。即ち榮正を希ふ」詩が、それぞれ載せられている。さらに二十四年三月発行の第十集には、「庚寅小春、亜細亜協会同人、

星使黎公を紅葉館に公餞す。敬んで長句を賦す。録して教正に呈す」および「庚寅重九、星使黎公、時に將に述職せんとす。中東の士夫を紅葉館に宴して登高の会を修す。兼ねて以て留別す。謹んで四章を賦す。並びに敬んで原韻二章に次す。録して誨正に呈す」と題された七律が見える。このうち丸岡莞爾については、落魄不遇の漢詩人小鷹西山麓の生涯を描いた安岡章太郎の小説『鏡川』（新潮社、二〇〇〇年）に詳しい。また〈大鳥公使〉は大鳥圭介、〈渡辺浩堂〉は渡辺洪基のことで、これらの詩はおおむね社交辞令に終始した儀礼的な作にすぎないものの、二十三年の七律「庚寅重九」詩の其一に於いては、自らを「天涯の倦客」と称して無能のまま消磨してゆくのを慚じる言葉が見え、其四では、

公從早歲策龍韜 公早歲從り龍韜を策し

薄海爭傳姓字高 薄海争い伝へて姓字高し

久藉敦槃招勝侶 久しく敦槃を藉りて勝侶を招き

直將經術挽狂瀾 直ちに経術を將て狂瀾を挽く

頻陪瀛島黃花酒 頻りに陪す瀛島の黃花酒

每憶京華赤棗糕 毎に憶ふ京華の赤棗糕

翹首五雲天際遠 首を翹ぐれば五雲天際遠く

側身西望夢魂勞 身を側て西のかた望めば夢魂勞す

と詠じて、帰国する黎庶昌を前にしたためか、後半でめずらしく北京を懐かしみ望郷の念を露わにしている。〈龍韜〉は、太公望の兵法書とされる『六韜』の一つ。起句は曾國藩の幕僚となったことをかく称したものか。〈薄海〉の語、『尚書』益稷に「州に十有二師あり、外は四海に薄る、咸五長を建つ」と見え、ここでは東海の地をいい、わが国を指す。〈敦槃〉は、古代、諸侯の会盟で用いられた礼器。敦は食を盛り、槃は血を盛る。『周礼』天官・王府に「若し

諸侯を合せば、則ち珠敦玉槃を共にす」とある。〈狂瀾を挽く〉は、中唐・韓愈「進学解」の「狂瀾を既倒に廻らす」を踏まえ、衰勢を挽回する意。当時のわが国がひたすら欧化に突き進むなか漢学振興に寄与したことをいう。〈黃花酒〉は、菊花酒。〈赤棗糕〉は、清・敦崇『燕京歲時記』（小野勝年訳注が『北京年中行事記』として岩波文庫に、更に『燕京歲時記』と改題して平凡社東洋文庫に収められている）に見える重陽節の風物詩、花糕の一種であろうか。

ところで、二十一年四月に亜細亜協会から「北清地方の商業の実況を輯録」した仁礼敬之の『北清見聞録』が刊行されたが、その第二篇に渡辺洪基とならんで張滋昉の序文が載せられているので、紹介しておく。

北清見聞録序

嘗讀孔子去兵去食、及孟子何必曰利、亦有仁義而已矣。未嘗不掩卷而嘆曰、世無聖賢、其孰能與於此、況居今之世、而欲行古之道、尤憂々乎其難哉。司馬子長曰、富者人之性情所不學而俱欲者也。又曰、千乘之王、萬家之侯、百室之君、尚猶患貧、況匹夫編戶之民乎。又曰、夫保鄙人牧長、清窮鄉寡婦、禮抗萬乘、名顯天下、豈非以富耶。論者皆以為子長發奮而傳貨殖、余獨以謂不然。蓋當是時、上有好大喜功之主、而國用匱乏、故不得已而為此補偏救弊之計耳。方今各國聯盟、首重通商、則其言益信而有徵、況貿遷為今日之急務。有心世道者、誠不可不亟為講求也。嘗觀近之游我國者、其記述大抵抄襲志乘、擇焉而不精、語焉而不詳、且未嘗與賢士大夫游、故齊東野語、悉入於中、以肆其輕侮譏訕之志。自有識者視之、多見其不自量耳。仁禮存心兄、留学我邦有年、歷游數省而歸。然不為阿世媚俗之論、而著此實事求是之說、豈非鑒中錚々者耶。其分門別類、詳細精密、讀者

當自辨之。今將付梓、問序於余、因書數語於簡端。
光緒戊子仲春張滋昉序

（嘗て孔子の兵を去り食を去る、及び孟子の何ぞ必ずしも利を曰はん、亦た仁義有るのみというを読み、未だ嘗て巻を掩ひて嘆じて曰はずんばあらず、世に聖賢無くんば、其れ孰か能く此に与せん、況んや今の世に居り、而して古の道を行はんと欲する、尤も憂々乎として其れ難い哉と。司馬子長曰く、富は人の性情の学ばずして俱に欲する所の者なりと。又た曰く、千乗の王、万家の侯、百室の君、尚猶ほ貧を患ふ、況んや匹夫編戸の民をやと。又た曰く、夫れ俚は鄙人の牧長、清は窮郷の寡婦にして、礼は万乗に抗し、名は天下に顕はる、豈に富を以てするに非ずやと。論者皆以為らく子長発奮して貨殖を伝すと、余独り以謂らく然らず。蓋し是の時に当たつて、上に大を好み功を喜ぶの主有り、而して国用匱乏す、故に已むを得ずして此の偏を補ひ弊を救ふの計を為すのみ。方今各国聯盟し、首に通商を重んず、則ち其の言益ます信にして微有り、況んや實遷今日の急務と為す。心の世道に有る者、誠に亟に講求を為さざる可からざるなり。嘗て近ごろの我国に遊ぶ者を観るに、其の記述は大抵志乗を抄襲し、扱びて精ならず、語りて詳かならず、且つ未だ嘗て賢士大夫と遊ばず、故に齊東野語、悉く中に入れ、以て其の輕侮譏訕の志を肆にす。有識者自り之を視れば、多く其の自ら量らざるを見るのみ。仁礼存心兄、我邦に留学すること年有り、数省を歴游して帰る、然れども阿世媚俗の論を為さず、而して此の實事求是の説を著す。豈に鍊中の錚々たる者に非ずや。其の門を分かち類を別かつ、詳細精審、読者當に自から之を辨ずべし。今將に梓に付さんとし、序を余に問

ふ、因つて數語を簡端に書す。）

《去兵去食》は、『論語』顔淵篇に子貢が政治の要諦をたずねたのに答えて、孔子が国を治めるには兵（軍備）や食よりも信義が大切で「民は信無くんば立たず」と説いたなかに見える。《孟子》は、『孟子』梁惠王篇上。《憂々乎其難哉》は、韓愈の「李翊に答ふる書」に見える言ひ方。憂々乎は、ぶつかつて音の出るさま。困難なことをいう。《司馬子長》は、漢・司馬遷（字は子長）。以下の引用は、『史記』貨殖列伝に見える。なお、清・姚鼐の「貨殖伝の後に書す」（『惜抱軒文集』巻五）に「世に言ふ司馬子長は己れが漢に罪せられ、自ら贖ふこと能はざるに因つて、發憤して貨殖を伝すと。余謂へらく然らず」云々とある。《實遷》は、交易。《齊東野語》は、道理を弁えない愚人の言葉（『孟子』万章篇上）。《實事求是》は、物事の実態に即して正確に認識把握する。もとは『漢書』河間獻王伝に見える語。《鍊中錚々者》は、ぶつうの人のなかで優れている者の喩え（『後漢書』劉盆子伝）。

仁礼敬之が上海に遊学する際、張滋昉が贈つた七絶二首が明治十六年十月十六日刊の『亜細亜協會報告』第九篇の文苑餘賞欄に載せられており、そのうちの一首は前稿で取り上げた。なお、薩摩出身の仁礼は小田切萬壽之助や宮島大八とともに明治十三年二月に設立された興亜会の支那語学校に学び、十五年五月その閉鎖に伴つて東京外国語学校に移つた一人で、生年は詳らかにしないが、大植四郎編『明治過去帳』（東京美術、一九七一年）には、農商務省に入つた後、両毛鐵道会社支配人を務め、二十八年台湾総督府に出仕し、翌二十九年十二月に台北で歿したという。著作には『北清見聞録』の他に二十七年刊の『清仏戦争日記』、二十八年刊の『清国通商』があり、後者には樺山資紀が序文を寄せている。

中林梧竹

中林梧竹（一八二七～一九一三）と張滋昉との関係については、前稿執筆の際、佐々木盛行氏の『中林梧竹——人と書芸術の実証的研究』（西日本文化協会、一九九一年）を参照したが、『墨美』第二九〇号（一九七九年四月）掲載の「中林梧竹①生涯篇」及び第二九五号（同年十一月）の「中林梧竹 書道研究篇上」は見ることでできなかった。その後、「中林梧竹①生涯篇」に次のように述べられているのを知ったので、これも次に挙げておく。神田博士の『日本における中國文學Ⅱ——日本填詞史話下——』（『神田喜一郎全集Ⅶ』）に張滋昉のことが触れられているのを除けば、その事跡について簡潔ながら最も早く紹介された記事だと思われる。

張先生＝張滋昉。清國人。明治十三年二月十三日、支那語学校（愛宕下天徳寺境内）の設立計画が興亜会の事業として企画されるに当たり、興亜会創立委員が集会を開いた。この時に講師となる上海から招聘された張滋昉も出席した。創立委員長は旧宗家鍋島藩主直大公である。興亜会（会長長岡護美、副会長渡辺洪基）は毎月一回親睦会を開き、例えば明治十五年六月二十一日には築地の寿美屋で、副島種臣、榎本武揚、清国欽差大臣黎庶昌、張滋昉も出席している。興和会は、明治十六年一月二十日に「亜細亞協会」と改名した。

張滋昉は東京帝国大学の支那語科担任であった。が、明治三十年に中風症で大学を退職した。種臣語るに「氏は我国に支那語の教授を肇めた鼻祖である」と述ぶ。種臣は氏の退職後の生活を心配して大隈重信にも救助方相談した。が、重信野に

下り御流れとなった。同三十二年清国に帰国した張は、同三十三年十一月二十一日上海で歿した。種臣とは非常に懇意であった。梧竹と三人は、痛飲して清談をした。

これは副島種臣の「秋晚張先生を邀へて飲み、遂に梧竹に束す」詩に附された佐々木氏の語注に見える。この詩は、『蒼海全集』巻四に載せるもので、

餐無甘旨已如何	餐に甘旨無く已に如何せん
夫子飄蕭枉駕過	夫子飄蕭として駕を枉げて過る
節士性情嘗苦得	節士の性情は苦を嘗めて得
騷人憂悶味酸多	騷人の憂悶は酸を味ふこと多し
笑窺叢菊英英色	笑いて叢菊英英の色を窺ひ
醉撫孤松磊磊柯	酔いて孤松磊磊の柯を撫す
乘興未須言日夕	興に乗れば未だ日夕を言ふを須ひず
辛勞待出月中娥	辛勞して出づるを待たん月中の娥

と詠じられている。〈節士〉は張滋昉を指し、〈騷人〉は自身のことをいうのであろう。後半には陶淵明詩の「帰去来の辞」や「飲酒」詩などに基づいた表現が用いられている。

ただし、佐々木氏が第七句について、〈須〉を「味（夜あけがた）と同じで、未味」となり」とし、「興に乘りて未須、言すること日夕」と訓じておられる点は、些か首肯しがたい。石田東陵編『蒼海詩選』巻五には〈須〉を〈須〉に作っており、それに従うべきであろう。

また、佐々木氏は、この詩を明治十九年（一八八六）の作かと推定されているが、『蒼海全集』には多少の出入りはあるものの、おおむね制作年代を追って詩が配列されており、巻四の劈頭、この詩のすぐ前に「紅葉館にて清欽差大臣黎、書記孫、朝鮮辦理公使金に

同じく長岡通侯の韻に次す」詩二首が載せられていて、それが明治二十一年の作であることからすれば、これもやはり同じ年に作られたものとみる方が妥当かと思われる。ついでに言えば、「紅葉館」云々の詩は、十月三十一日に垂細重協会が芝の紅葉館で開いた親睦会の席上の作で、黎は黎庶昌、孫は孫點、金は金嘉鎮、長岡通侯は長岡護美のこと。それぞれの作は「會餘録」第四集にも掲載されている。

赤沼金三郎

『逍遙遺稿』外篇に信州諏訪出身の赤沼金三郎（一八六五～一九〇一）に寄せた明治二十七年（一八九四）作の「短歌行、赤沼士朗に寄す」と題する作がある。士朗は、その字。初め天心狂史と号し、後に枕戦学人とも称した。日清戦争に志願兵中尉として出征したのに因んだのである。なお、「短歌行」というのは楽府題で、魏の曹操の作がよく知られているが、若き日の過ぎ去りやすく人生の短いのを嘆じ、酒を飲んで憂を晴らそうという内容のものが多く。

士朗信州之快男子
愜慨有奇氣

一周扶桑六十州
行程食竭只飲水
南豫威卿以文交
校門把臂直傾意
士朗不嗜酒
咀豆罵英雄
威卿好悲歌

士朗は信州の快男子
愜慨して奇氣有り

一周す扶桑六十州
行程食竭き只だ水を飲む
南豫の威卿 文を以て交はり
校門 臂を把つて直ちに意を傾く
士朗 酒を嗜ま^{この}ず
豆を咀^かんで英雄を罵る
威卿 好んで悲歌し

吊古哭烈士 古を弔つて烈士を哭す
談蘭豆已盡 談^{たけなは}蘭にして豆已に尽き
天凍夜欲死 天凍つて夜死せんと欲す
士朗眼中總無人 士朗眼中総て人無く
威卿襟邊只有淚 威卿襟邊只だ涙有り
君不知疾風吹艸勁弱知 君知らずや疾風艸を吹いて勁弱を知る
雲漢茫茫大月墜 雲漢茫茫として大月墜つ

ここに詠じられている「豆を咀んで英雄を罵る」赤沼の姿は、ある意味で貧書生の常態とはいえ、そこには極めて意気軒昂たるものがある。その昔、荻生徂徠は人から先生は講学の外に何をお好みですかと問われて、別にこれといってないが、ただ炒り豆を嚙つて、古今東西の人物を槍玉にあげることだと語ったというが（原念斎『先哲叢談』巻六）、それを彷彿とさせよう。

二歳年下の逍遙とは、赤沼が明治二十二年（一八八九）七月、第一高等中学の法科一年から転じて文科二年に入ってきたとき、ちょうど同じ組になっており、若き日の夏目漱石や正岡子規も一緒にあった。子規が「筆まか勢」第一篇に記している「生徒の尊称」には、the Sincereと評されている。その頃、「痛く抑制して自から修むることストア哲學者の如く」、苦に堪え難を忍ぶ精神鍛練の意味で夏に重ね着をし冬に単衣でいるようなことを敢えてし（高橋作衛『天心遺稿』叙）、そのためであろう、子規が二十三年の一月に書き綴った小説「銀世界」に赤ペンで評語を加えた漱石は、第五篇「親の雪」の「誰だつて寒くない筈はない、ヨ、寒い」という一節に「寒クナイト云フ人ハ赤沼先生許リナリ」と半ば揶揄気味に書き込んだこともあった。その他、周囲の思惑を顧慮せぬ真率な言動が奇行狂態とみなされ、学友たちを驚かせたことは、岡村司「文学士赤沼金

三郎君伝」に見えるが、高等中学の寄宿寮における自治制度の確立に尽力したのも、この赤沼士朗であつた。そのこともあつてか、逍遙や漱石・子規とは一年遅れて二十四年に岩元禎・不破信一郎・山川信次郎（以上文科）や高橋作衛（政治科）らと同期で第一高等中学を出ることになったが、その後、文科大学の哲学科に進み、やがて漢学科に転じて三十年（一八九七）に白河鯉洋とともに卒業。第一高等学校、京華中学などで倫理修身を講じ、三十四年（一九〇二）十一月五日に肺結核のため三十七歳の生涯を閉じた。

その遺稿集『天心遺稿』を編んだ高橋作衛は、

……而して余が最も居士の長逝を惜む所以は稀世の篤學者且つ能文家を失ひたることなり、一般識者の歎するが如く近來漢文學漸く衰へ帝國大學等に在て所謂漢文を専修するものも往々漢文を草する能はず又漢書に通曉せざる者多きは事實なるが如し是れ蓋し輓近學生の素養漸く乏しく又百科の學を研究するの必要に迫られ遂に意を漢書に専らにする能はざるに由る是の時に方り嶄然頭角を露はせしもの二人あり即ち天心居士及故中野逍遙是れなり、逍遙は才を以て勝ち一氣呵成乍ち千言の詩賦を爲し、常に自から司馬相如を以て居る其一朝病に斃れたるは吾人の遺憾とする所なるが、天心居士に至りては更に惜むべきものあり、天心居士の漢學に於ける其素養洵に深く、幼時已に鹽原叢竹先生の薰陶を受けて後上京、東京大學古典講習科に入り今の鹽谷青山君等と異級同窓の契あり爾來其學漸く進み文科大學に入るに及び古今東西の哲學を比較研究するに方り諸子百家を研究し學力に於て優に儔倫を抜きたるのみならず、其文章に巧みなるや數行並び下り千言立るに成る、其文字往々瑕疵あるも要するに大家の口調を有し其學と其文と優に博士たるに價する

こと疑はず、若し居士にして生存今日に至らしめば此遺稿そのものを提出するも已に以て此學位を得ることを信ずるものなり而して今や空し矣

云々と、天心居士赤沼士朗が漢文に秀でていたことを回想するなかで、これまた旧交のあつた中野逍遙についても追懷している。

後年、黒頭巾こと横山健堂が『舊藩と新人物』（敬文館書店、明治四十四年）の「一五、信越附佐渡（十三）（十四）」に於いて文学士赤沼金三郎を取り上げ、

赤沼の時、文科大學に二文才あり。赤沼と中野逍遙と也。逍遙は、伊豫の人、過敏にして容顏婦人の如く、赤沼の豪宕なると相反す。而して其の文章は、才華爛熳、極めて華やかなり。赤沼は能く意を達するのみ、敢て修飾を加へず。而して千言立るに成るの概あり。此の二人者皆故人となる。爾後、文科學生、漢文を屬して、能く自在なること、此の如き者、またあること無し。

と記したのは、おそらく高橋作衛の文章を踏まえたものであろう。

ところで、この赤沼は漢学科に在学中、盲目的な欧米崇拜のあまり「方今邦人輕佻に趨り、喜んで西人功利の書を誦し、四子六經に至つては、則ち舍てて講ぜず」という世上に瀰漫する浮薄な風潮を嘆き、その実「我の舍つる所は、彼則ち之を取り、以て希世の宝典と為す」のを知らずにいる現状に警鐘を鳴らすべく、レッグ James Legg（一八一五〜一八九七）をはじめとする泰西諸家の孔子論や伝を英文から訳出編纂し、『孔夫子』と題して明治二十六年（一八九三）六月に上原書店から刊行した。それには漢文による自序を附し、その後に篁村島田重礼、成斎重野安繹、中洲三島毅、豊城星野恒といった当時の文科大学漢学科の教授や講師による評語が

加えられており、その最後に張滋昉のそれが載せられている。

中正之論、不偏不倚、與出奴入主者、有霄壤之別、足以塞囂囂者之口。且援引博洽、議論明暢、洵屬有功斯道。

（中正の論、不偏不倚、出奴入主の者と、霄壤の別有り、以て囂囂たる者の口を塞ぐに足る。且つ援引博洽、議論明暢、洵に斯道に功有るに属す。）

「出奴入主」は、韓愈の「原道」に「其の道德仁義を言ふ者は、楊に入らざれば則ち墨に入り、老に入らざれば則ち仏に入る。彼に入る者は必ず此を出づ。入る者は之を主とし、出づる者は之を奴とす」とあるのに基づく。ひとつの学説や見解を頑なに守ること。

ちなみに、明治期における孔子研究を代表する学術書として、哲学科を出た蟹江義丸（一八七二～一九〇四）の『孔子研究』があり、明治三十七年（一九〇四）に金港堂から刊行されたが、そこに同期卒業の赤沼の著書も挙げてある。

小柳司氣太「荳鐘録」

南豫威卿性峭岸	南豫の威卿	性峭岸
卓然常爲白眼看	卓然として常に白眼の看を為す	
咄々書字睨大空	咄々字を書して大空を睨み	
意氣慷慨斗牛貫	意氣慷慨 斗牛貫く	
羈絆脫來未數旬	羈絆脱し來つて未だ數旬ならずして	
鵬翼直欲覆天半	鵬翼直ちに天半を覆はんと欲す	
何圖一朝玉樹摧	何ぞ図らん一朝にして玉樹摧かれ	
空裁錦繡詫憤惋	空しく錦繡を裁ちて憤惋を詫ぐるを	
猶記當年西湖會	猶ほ記す当年西湖の會	

滿身奇氣盜兩眉	滿身の奇氣 兩眉に盜るるを
寒夜青燈澆磊塊	寒夜青燈 磊塊を澆ぎ
藻思傾盡筆如馳	藻思傾け尽くして筆馳するが如し
少陵沈鬱澣花淚	少陵の沈鬱 花に澣ぐ涙
太白飄逸把杯姿	太白の飄逸 杯を把る姿
別有水刃藏筐底	別に水刃の筐底に藏する有り
醉中一振短髮披	醉中一たび振へば短髮披く
可哀半生空鬱勃	哀れむ可し半生空しく鬱勃
千里天涯葬奇骨	千里天涯 奇骨を葬むる
遺編閱來暗銷魂	遺編閱し來たりて暗に魂を銷す
掩卷先拭双淚痕	巻を掩ひて先づ拭ふ双淚の痕

※岩波文庫本は誤つて「醉」字を「碎」に、また「編」字を「郷」に作る。

ここに示したのは、柳々子小柳司氣太（一八七〇～一九四〇）の「中野威卿を弔す」詩（『逍遙遺稿』外編、雜録所収）である。田岡嶺雲とともに文科大学漢学科の選科に学んだ小柳司氣太は、三歳年上の中野逍遙とは同期で彼の歿後『逍遙遺稿』編集に中心となつて尽力した一人でもあった。詩中に見える「西湖の會」は、おそらく上野不忍池畔の長酹亭あたりで開かれた田岡嶺雲を始めとする「夜鬼窟」同人の集まりを言うのであろう。そしてこの弔詩の後に、酒を飲むとふだんとはうって変わつて節を撃ち朗々と杜詩を誦する逍遙の姿を伝えている。

当時の「酔ふと、詩吟劍舞する氣銳の漢學生」から時を経て「謹厚なる老先生」（笹川臨風『明治還魂紙』）となつた小柳司氣太は、昭和十五年（一九四〇）に一年遅れで開かれた古希祝賀の宴で、かつて学んだ漢学科の教授たちや十五の歳から上京するまで教えを受

けた郷里の私塾長善館の第二代館長鈴木惕軒について、その師恩を記した「荳鐘録」を列席者に配り、自らの今日あるのを謝した。そのなかに島田篁村・竹添井井・重野成斎・星野豊城らといった教授陣に並んで張袖海の名が見えている。これは昭和十七年刊の森北書店版『東洋思想の研究』にも附載された。

ちなみに、『荳鐘』の語は、『説苑』卷十一、善説に「子路曰く、天下の鳴鐘を建て、之を撞くに荳を以てせば、豈に能く其の声を発せんや。君の先生に問へる、乃ち猶ほ荳を以て鐘を撞くがごとき無からんや」、東方朔の「客の難するに答ふ」に「語に曰く、管を以て天を窺ひ、蠡を以て海を測り、荳を以て鐘を撞かば、豈に能く其の条貫に通じ、其の文理を考し、其の音声を発せんや」、『漢書』東方朔伝、『文選』卷四十五）というのに拠り、せつかく当代の碩学鴻儒に就いて教えを受けても己が浅才非力ゆえ多くを学び得なかつたとする謙遜の意を込めたものであろう。

張袖海先生

曰白話、曰時文。卑者通于急就凡將、高者汎濫於宋詞元曲。支那語學之盛、莫甚今日。大學亦夙有見於此。當時既聘先生、令主之講席。初課以亞細亞言語集、稍進至西廂記桃花扇等而止。然學生未及知其必要、作輟靡常、十寒一暴。先生亦不巧教術。講席輒從容吹煙、頽唐自放耳。副嶋蒼海詩集、收贈于先生詩數首。其一曰、人間只看白頭翁、天覆蒼茫雨又風。暫撤上賓號白日、聊將意氣掃長虹。百年抱負孤身裡、無限神情一盞中。話到荊州相見日、如今公亦嘆飄蓬。先生其隱于象胥者歟。（白話と曰ひ、時文と曰ふ。卑き者は急就・凡將に通じ、高き者は宋詞・元曲に汎濫す。支那語學の盛なる、今日より甚しきは莫し。大學も亦た夙に此に見有り。當時既に先生を聘し、之

が講席を主らしむ。初め課するに亞細亞言語集を以てし、稍や進んで西廂記・桃花扇等に至つて止む。然れども學生未だ其の必要を知るに及ばず。作輟靡常、十寒一暴す。先生も亦た教術に巧みならず。講席輒ち從容として煙を吹き、頽唐自放するのみ。副嶋蒼海詩集に、先生に贈る詩數首を収む。其一に曰く、人間只だ看る白頭翁、天覆蒼茫雨又た風。暫く上賓に撤して白日に号し、聊か意氣を將て長虹を掃ふ。百年の抱負孤身の裡、無限の神情一盞の中。話は到る荊州相見ゆる日、如今公も亦た飄蓬を嘆ず、と。先生は其れ象胥に隱るる者か。）

（急就（凡將）は、初級用のテキストをいう。（亞細亞言語集）は、広部精の編纂による明治十二、三年刊の中国語教科書。（作輟靡常）は、やつたりやらなかつたりで、継続性がないこと。（十寒一暴）は、『孟子』告子篇上の「天下に生じ易き物有り」と雖も、一日之を暴め、十日之を寒せば、未だ能く生ずる者有らざるなり」に基づく表現。全く効果が挙がらぬことをいう。（象胥）は、『周礼』秋官に見える官名で、通弁、通訳のこと。明治十四年五月七日発行の「興亜会報告」第十六集の和文雜報欄に載つた興亜会の第二代會長伊達宗城による「一週年會ノ祝文」には、支那語學校の順調な發展經過を報じ、教員の勉勵ぶりを述べて、「就中張教師ノ如キハ、人ニ誨テ倦マス。未ダ曾ツテ一日モ放逸セシメズ。是レ實ニ興亞至要ノ舟車タリ」と称えられており、草創期のことゆえ「すべての事が不整頓で、教授法など全く無關心であつた」にしろ、「只暗誦だけは嚴重にやらせられ」という生徒の一人宮島大八は、「このやり方のおかげで、語學にも文學の根底にもなつたと思ふ。これは實に興亞學校に入つたおかげだとおもふ。この恩義は忘れられない。この興亞學校ほど思ひ出深き處はない」と回想している（詠歸舎閑話）。

中国文学研究会編輯「中国文学」第八十三号、昭和十七年五月）。これはひとえに興亜会の支那語学校では教える側も学ぶ側も使命感に燃えていたことによるのであろう。だが、帝国大学では状況が一転して、学生は中国語の必要性を十分に認識していないためか身を入れて講義に臨もうとせず、先生も教えるのがへたで巧くゆかず、教壇で悠然と煙草をくゆらせるありさま。傍目には意気揚がらず投げやりで、いいかげんとも思えるような教授ぶりであつたらしい。とはいえ、よしんばそういう心もとなない教師であつたとしても、その姿に只者ではない雰囲気を感じとつた者がいたのである。中野逍遙や田岡嶺雲、小柳司氣太はそうした学生の一人であつた。そして小柳の場合、おそらくは後年に蒼海の詩を目にして、その当時の清国人教師の心事のほどを推察したのであろう。ここに引かれている副島種臣の詩は、「張先生と同じく飲む」と題する作で、『全集』巻四及び『詩選』巻五に見え、それには〈看〉字を〈著〉に作る。

ところで、先に挙げた「中野威卿を弔す」詩には「羈絆脱し来つて未だ数句ならずして、鵬翼直ちに天半を覆はんと欲す」の句が見えていたが、これはひとり逍遙のみならず、明治二十七年七月大を出た後、その歳の十一月三日に「東亜説林」を創刊し、新たな東洋学樹立のために大いに気を吐かんとした小柳司氣太自身を含む「夜鬼窟」同人のことを指して言つたのに違いない。逍遙は志半ばにして斃れたが、同人たちは翌年四月に東亜学院を創設するに至つた。資金難のためわずか半年あまりで潰えたものの、それは「經学子類」を以てする支那哲学、「詩文戯曲小説」を以てする支那文学、「政法法制」を以てする東洋史を科学的に研究することをめざし、本科・漢学別科（各二学年）に朝鮮支那語専修科（一学年）を設けた本格的なもので「本邦及び西欧學術」にも目配りした画期的な

試みであつた。評議員に副島種臣・谷干城や加藤弘之・島田重礼・重野安繹らを擁し、講師として「夜鬼窟」同人の田岡嶺雲・小柳司氣太・藤田豊八・宮本正貫・西谷虎二はもとより、二十三年に哲学科を出た服部宇之吉それに当時まだ文科大学の学生であつた狩野直喜・桑原隲蔵や不破信一郎らが名を列ねるほか、さらに岩溪裳川・大江敬香といった在野の漢詩人が迎えられており、張滋昉の名も見える（明治二十八年三月二十五日刊「精美」第四十四号掲載「東亜學院設立趣旨」に拠る）。

なお、ここに紹介した「荳鐘録」のことは、村山吉廣氏から御教示をいただいた。その村山氏の監修で『近世之醇儒 小柳司氣太』（小柳司氣太博士顕彰記念誌編集委員会、一九九九年）が故郷の新潟県中之口村から刊行されており、その第二章第三節「東京帝国大学選科時代」には『逍遙遺稿』について「の項が立てられ、先に示した「中野威卿を弔ふ」詩が岩波文庫本に基づいて書き下しとともに挙げてある。また村山氏の『漢学者はいかに生きたか——近代日本と漢学——』（大修館、一九九九年）にも小柳司氣太についての一章が設けられている。

二代目琳琅閣主人の回想

昭和九年（一九三四）、訪書会から刊行された反町茂雄編『紙魚の昔がたり』に収められた琳琅閣二代斎藤兼蔵の思い出話「初代琳琅閣主人とその周辺」に、揚守敬について語っているなかで張滋昉の名が出てくる。今、平成二年（一九九二）に出た八木書店版の『紙魚の昔がたり明治大正篇』から、その箇所を引くと、

……また張滋昉^{マツ}という大学へ教授に来ていた人がよく来まし

た。ちょうど日清戦争時分に日本に居られたので、敵愾心てきがいしんというのか、日本の人が乱暴をしたり、石をぶつけたりして困る、と言っておられました。この人も大学をやめて困っておられたので、遂に国へ帰られました。帰る間に、佐伯文庫に在った大観帖を売りましたが、大変に喜んで、支那へ帰って売れば帰りの旅行費が充分に出る、と言っておりました。

とある。中風症にかかり大学の雇いを解かれて後の張滋昉の窮乏ぶりについては、前稿で紹介したように、「東京朝日新聞」に出た副島種臣の談話や「日本人」に載った田岡嶺雲の「張滋昉氏を懷ふ」と題する追悼文にも触れられている。

森川竹磎「病起懷人詩」

森川竹磎（一八六九—一九一七）の「病より起きて人を懷ふ詩」については、前々回の札記で落合東郭を、前稿で張滋昉を詠じた作をそれぞれ紹介しておいた。竹磎が当初この詩を明治二十三年十二月発行の「鷗夢新誌」第五十三集に掲載したときには、すべて二十六首あり、その後「張袖海曰く」として評語が附されていたのが、翌年四月に上梓された『得閑集』では評語の類はすべて削られ、詩の数も三十五首に増やされている。そこで、張滋昉の評語を参考までに挙げておく。

竹磎性好苦吟。夏間抱恙、幾瀕於危。余惄然憂之。頃已吉占勿藥、攜懷人詩過訪。讀之風華掩映、才氣橫溢。知與此道結契甚深、竟有不能須臾離之勢。然當自重、慎勿效長吉嘔心也。

（竹磎、性苦吟を好む。夏間恙を抱き、幾んど危に瀕す。余惄然として之を憂ふ。頃ろ己に吉占して棄すること勿し、人を

懷ふ詩を携えて過訪せらる。之を読むに風華掩映し、才氣横溢す。此の道と結契すること甚だ深く、竟に須臾も之を離る能はざる勢有るを知る。然れども当に自重して、慎んで長吉の嘔心に效ふこと勿れ。）

（勿藥）は、医薬の必要がないこと。『易経』无妄に見える語。（惄然）は、胸がしめつけられるさま。心痛めること。（風華）は、風采才華。（長吉）は、中唐・李賀の字。詩作に専心し、この子は心を嘔き出してしまふまでやめないだろうと母親が嘆じたという（李商隱「李賀小伝」）。二十七歳で歿した。

また、これまで気づかなかつたが、竹磎がこの詩を作ったのは、実は先蹤に倣ったもので依拠するところがある。このこと自体は張滋昉その人と直接結びつく事柄ではないにせよ、今述べたように「鷗夢新誌」で評語を加えており、さらに『得閑集』に駢体の序文を寄せていて（明治二十四年五月発行「鷗夢新誌」第五十八集にも掲載）、その意味では、全く関係がないわけではないので、このことについてに記しておきたい。

すなわち、竹磎の「病より起きて人を懷ふ詩」の序に、

入夏臥病、瀕死者再。中間旬餘、惘然如夢。至三匝月、始能彊起。不與故人相見者久矣。小院晝靜、相思何堪。乃拂拭几研、謾成小詩三十五首。見者當憫其勞而喜其能不廢此事耳。只意到成章、亦不更次第也。

（夏に入りて病に臥し、死に瀕する者再びなり。中間旬餘、惘然として夢の如し。三匝月に至りて、始めて能く強ひて起つ。故人と相見ざる者久し矣。小院晝靜かにして、相思何ぞ堪えん。乃ち几研を払拭して、謾りに小詩三十五首を成す。見る者当に其の勞を憫れんで其の能く此の事を廢さざるを喜ぶべきの

み。只だ意とりて章を成す、亦た次第を更めざるなり。」

※『鷗夢新誌』では詩題を「病起懷人詩二十六首」としており、

文中に〈三十五首〉の四字がない。

というのは、清・郭頻伽（名は馨、字は祥伯。吳江の人。一七六七～一八三二）の「病より起きて人を懷ふ詩三十首並びに序」（『靈芬館詩三集』卷二）に、

臥病一月、瀕死者再。中間旬餘、惛然如夢。時惟壽生一來看視。稱藥量水者、吳季子獨游余弟丹叔而已。虛堂偃息、稍復似人痛定思痛、念幾與諸故人不可復相見。伏枕呻吟、顯顯在目。又少時始得起坐。拂拭几研、聊復試筆、滴藥汁和墨、一食頃得絕句三十首。獨游丹叔取而讀之。憫其勞而喜其能不廢此事也。爲鈔錄存之。意到即成章、亦不更次第云。

（病に臥すること一月、死に瀕する者再びなり。中間旬餘、惛然として夢の如し。時に惟だ寿生「潘眉」一たび来りて看視す。藥を称り水を量る者、吳季子獨游「吳鵬」、余が弟丹叔「郭鳳」のみ。虚堂に偃息し、稍や復た人の痛み定まって痛みを思ふに似たり。幾んど諸故人と復た相見えざるを念ふ。枕に伏して呻吟し、顯顯として目に在り。又た少時始めて起坐するを得。几研を拭拭し、聊か復た筆を試み、藥汁を滴して墨に和し、一食頃にして絶句三十首を得。獨游・丹叔取りて之を読む。其の勞を憫んで其の能く此の事を廢さざるを喜ぶなり。為に鈔録して之を存す。意到りて即ち章を成す、亦た次第を更めずと云ふ。）とあるのに倣っていることは、紛れもない。

それに、そもそも『得聞集』という名称についても、竹溪はその自序のなかで蘇子瞻（名は軾、号は東坡）の「病に因つて閑を得たる殊に悪しからず」（「病中、祖塔院に遊ぶ」詩）から取ったものだ

と言うが、これも郭頻伽が嘉慶十年（二八〇五）六月から十月までの作を「得聞集」と名づけて、

五月以前、屢牽人事、且妄欲致力於古文辭。故詩絶少。六月臥病、幾死者至再。至三匝月、始能彊起。看書則目眩、為文則氣弱。未忘結習、呻吟中時有所作。東坡詩云、因病得閑殊不惡。勞人草草、於此求息、亦足嘔矣。

（五月以前、屢しば人事に牽かれ、且つ妄りに力を古文辭に致さんと欲す。故に詩絶だ少し。六月病に臥し、幾んど死せんとする者再びに至る。三匝月に至つて、始めて能く強ひて起つ。書を見れば則ち目眩み、文を為れば則ち氣弱し。未だ結習を忘れず、呻吟中時に作る所有り。東坡の詩に云ふ、病に因つて間を得たる殊に悪しからずと。勞人草草、此に息を求む、亦た嘔くに足れり矣。）

と記しているのが当然ながら強く意識されているよう。郭頻伽の「病より起きて人を懷ふ詩」も、この「得聞集」に収められている。なお、先に見えた「痛み定まって痛みを思ふ」は、韓愈の「李翱に与ふる書」に「今にして之を思へば、痛み定まれる人の、痛みに当たるの時を思ふが如し」と見えるのに基づく表現。それから、ここに「古文辭」というのは、郭頻伽が『古文辭類纂』全七十五巻を編んだ惜抱先生姚鼐（字は姬伝。桐城の人。一七三二～一八一五）に師事していた関係からで、その長子で三歳年下の持衡（二に景衡。字は根重）とは同じく江寧（南京）の鍾山書院に学んだ親しき友であった。また「勞人草草」は、『詩経』小雅・巷伯の「驕人は好好たり、勞人は艸々たり」を踏まえ、勞人は、いたづき病む者。草草は、憂苦のさまをいう。

もっとも、竹溪が摸したのは序文ばかりでなかった。その序詩と

も言うべき第一首目に、

一病沈綿三月餘 一病沈綿 三月餘

起來殊覺意蕭疏

起き来つて殊に覚ゆ意蕭疏たるを

縱教吟骨孱如此

縦ひ吟骨をして孱きこと此の如くならしむるも

應有故人能記予

必に故人の能く予を記する有るべし

※「鷗夢新誌」では「沈綿」の二字を「纏綿」に作り、また「縦

字を「假」に作る。

というのは、その転句を郭頻伽の第一首目「枕を欹てて鰥鰥として夜闌に到り、月痕漸く淡く燭光残す。若し病骨孱きこと此の如くに非ざれば、那ぞ識らん虚堂六月寒きを」とある第三句から換骨奪胎して用いている。

さらに第二首の森槐南を詠じた作に於いて、

詩壇認箇魯靈光 詩壇 箇の魯靈光を認む

度曲填詞亦壇場 度曲填詞亦た壇場

博得大名天下徧 大名を博し得て天下に徧く

猶言飲酒本無量 猶ほ言ふ飲酒本と量無しと

というのは、その前半二句を郭頻伽が浙西六家のひとりである『有正味齋詩集』のある呉穀人（名は錫麒、字は聖徴。錢塘の人。一七四六―一八一八）を詠じて、「詩壇両浙魯靈光、老いて填詞を愛すも亦た壇場」というのをほとんどそのままなぞっているのである。（魯靈光）は、前漢の時代に景帝の子、魯の恭王が建てた宮殿の名で、幾度も戦火を免れて残ったという。『文選』卷十一、後漢・王延寿「魯靈光殿の賦」の序に見える。そこから転じて年長けた得難い人物という語として用いられる。詩壇の耆宿重鎮に対して用いるなら別だが、いかに天分すぐれ詩のみならず填詞から散曲に至るまで往くと

して可ならざるはなき槐南とはいえ、まだ三十歳にもならぬうちから竹磎にこのように持ち上げられては、当人も多少は憐れなく感じたことであろう。

それはともかく、竹磎の『得聞集』に題詩や題詞を寄せた十五名にものぼる詩人たちのうち、永坂石埭（明治二十三年当時四十六歳）・佐藤六石（二十七歳）・野口寧齋（二十四歳）それに森槐南（二十八歳）の四人は、さすがに郭頻伽について言及しているので、その作をそれぞれ次に掲げておく。このうち寧齋の詩以外は、神田博士の前掲書「七十七 竹磎の『得聞集』」及び「七十八 竹磎の『得聞集』」に挙げられていて、先に言及した張滋昉の序も、そのなかに引かれている。

題詩三首其二

石埭永坂周

眉白郭郎才絶倫

眉白の郭郎 才絶倫

也曾病起賦懷人

也た曾て病より起き人を懷ふを賦す

詩家自古嘔心慣

詩家古へ自り心を嘔くこと慣れ

嘔盡舊心思更新

旧心を嘔き尽して思ひ更に新たなり

（眉白）の語、郭頻伽は片方の眉が白く、そのため「郭白眉」と称されたことによる。靈芬館詩二集に附された呉錫麒の序に「瘦身玉立して一眉瑩然たり。故に人皆白眉を以て之を称す。遂に并せて其の詩も亦た称して郭白眉詩と為すと云ふ」と。（嘔心）は、李長吉

の故事。

題詩三首其三

六石佐藤寛

臥看裊裊藥煙幽

臥して見る裊裊として藥煙幽なるを

詩句偶然來枕頭

詩句偶然枕頭に來たる

院小無風花氣澹

院小にして風無く花氣澹なり

簾空於水月痕流

簾水に空しくして月痕流る

瓣香應祭靈芬館 瓣香^{まさ}心に祭るべし靈芬館
 低首偏欽湖海樓 低首^{ひと}偏へに欽す湖海樓
 自是洛陽高紙價 自らは是れ洛陽紙価を高くし
 新篇竟合百年留 新篇^{つひ}竟に合に百年留むべし
 〈瓣香〉は、敬仰の意。〈湖海樓〉は、清・陳維崧（字は其年、号は迦陵。宜興の人。一六二五―一六八二）のこと。竹篔が愛好した詞人で、「鷗夢新誌」第五十六集（二十四年三月）には竹篔の「湖海樓詞集の後に書す」詩が載せられている。※この詩は、昭和四年刊の『六石山房詩文鈔』（巻四）にも収む。
 題詩七首其四 寧齋野口式
 別有靈芬館 別に靈芬館有り
 病來才未孱 病來 才未だ孱からず
 若使性情同 若し性情をして同じからしめば
 貌似任等閑 貌似たるは等閑に任す
 懷人妙絕句 人を懷ふ妙絶句
 偶然看一斑 偶然 一斑を見る
 〈任等閑〉は、どうでもよいことの意。※〈同〉字、「鷗夢新誌」第五十六集では〈近〉に作る。
 題詞 沁園春 槐南森大來
 病是厭厭 病は是れ厭厭たるも
 也算人生 也た人生に算す
 此際最閑 此の際 最も閑なり
 便閒中樂趣 便^{すなは}ち閑中の樂趣は
 金尊檀版 金尊に檀版
 病中詩夢 病中の詩夢は
 紅粉青山 紅粉か青山か

春鳥園林 春鳥の園林
 秋花池館 秋花の池館
 只恐潘郎星鬢斑 只だ恐る潘郎星鬢斑なるを
 流年早 流年早し
 伴簾前詠絮 簾前に伴して絮を詠ずるは
 謝妹煙鬟 謝妹の煙鬟
 蠶眠 蚕のごと眠り
 又界烏闌 又た烏闌を界す
 問似草新詞刪不刪 問似す新詞を草して刪すや刪せざるや
 定小紅吹簫 定めて小紅^{ふえ}簫を吹かん
 奴兒非醜 奴兒醜に非ず
 楊枝解舞 楊枝^よ解く舞ふ
 菩薩何蠻 菩薩何ぞ蛮なる
 倚竹幽居 竹に倚る幽居
 懷人妙句 人を懷ふ妙句
 敢道頻伽吟骨孱 敢へて道はん頻伽吟骨孱しと
 佳人笑 佳人笑ひ
 試相思琴調 相思を琴調に試む
 流水潺湲 流水潺湲
 〈也算人生〉は、これも人生のうちの意。〈檀版〉は、拍子をとる樂器の名。〈詩夢〉は、詩人の見る夢。〈紅粉青山〉の語、郭頻伽「病起懷人詩」其五の許青士（名は乃濟、字は作舟）を詠じた詩に「一笑才を憐れむ元^{もと}自り有り、只だ紅粉を除けば是れ青山」と見える。紅粉は、紅や白粉。美女を指す。〈潘郎〉は、西晋・潘岳のこと。美男子で知られ、三十二歳で白髪まじりになったのを嘆いた。〈星鬢〉は、ごましおの鬢髪。〈謝妹〉は、東晋・謝道韞のこと。かつ

て謝安が「白雪紛々何の似る所ぞ」と問うたところ、甥の謝朗が「塩を空中に撒けば差擬す可し」と言ったのに対して、姪の道蘊は「未だ柳絮の風に因つて起るに若かず」と答えたという『世説新語』言語篇）。竹磎の妹で詩を善くし芝蘭と号した三吉（美好）のことをかく称する。〈煙鬟〉は、美しい髻。〈烏闌〉は、烏糸欄。黒い罫線。〈小紅〉は、もと南宋・范成大の侍婢で、後に姜夔（白石）に贈られた。姜夔の「垂虹を過る」詩に「自ら新詞を作りて韻最も嬌、小紅低唱し我れ簫を吹く」と。〈簾〉は、簾と同じ。〈奴兒非醜〉（楊枝解舞）〈菩薩何蛮〉は、それぞれ詞牌の「醜奴兒」「楊花舞」「菩薩蛮」をもじった表現で、竹磎の詞がすばらしいことをいうのである。〈佳人〉は、具体的に誰を指すのか不明だが、神田博士の前置書「七十六 竹磎の『花影填詞圖』」に、高野竹隱「望湘人」詞の「記す菡桃年紀才に盛んなり、願はくは郎君の小婦と作らん」と云う末二句を挙げて、「何か本事があつたのかも知れない。菡桃は、宋の宰相寇準の妾であつた美人の名である」と言っておられるのと、同じ女性であるように思われる。〈相思〉云々、詞牌に「琴調相思引」があるのを踏まえている。〈流水〉は、琴曲の名。※「鷗夢新誌」第五十六集では〈樂趣〉の二字を〈樂事〉に、〈詩夢〉を〈情緒〉に、〈簾前〉を〈詩成〉に作る。また明治四十五年刊の『槐南集』（卷二十八）は〈池館〉を〈亭榭〉に、〈只恐〉を〈恐説〉に、〈簾〉を〈笛〉に、〈敢〉を〈肯〉に作る。

森川竹磎が靈芬館詩を嗜読愛誦し、他にもその詩を摸した作のあることについては、その『聴秋仙館詩稿』や『夢餘稿詞』を刊行された水原渭江氏が「近代日本詞壇紀事」（『中國文學と日本文學』所収。香港日本學術交流委員会、一九八〇年）に於いて「鷗夢新誌」の第一集から第百五十五集にわたってそれぞれの梗概を紹介されたな

かで、「第六十一集の竹磎の夏日田園雜興十首、夏日遊仙詩十首、夏日閨中詞十首といった、絶句三十首は郭頻伽の詩に擬して作ったものであらうと思う」と述べておられる。郭頻伽のほとんどの詩はいずれも『靈芬館詩二集』卷十、竿木齋集に収められており、嘉慶九年（一八〇四）の作である。

ところで、竹磎の座右に置かれていたのは、明治十七年から十八年にかけて東京の擁書城より刊行された石印本であるまいか。それには初集四卷二集十卷三集四卷まで入っているが、四集十二卷や詩餘詩話雜著の類は含まれていない。これより以前すでに森春濤が明治十一年に刊行した袖珍本の『清三家絶句』三卷（巖谷一六、小野湖山序）に張船山、陳碧城とともにその七絶百七十四首を収め、同年に出た冬野中島一男編集『清廿四家絶句』（川田壘江序、依田学海跋）にも丹羽花南の撰になる郭頻伽詩二十八首が収められている。

なお餘談ながら、清末の光緒二十九年（一九〇三）、日露戦争前年のわが国に留学し、同三十一年（一九〇五）に黄節（一八七三～一九三五）や柳詒（一八八七～一九五八）らとともに「国粹学報」を創刊し、宣統元年（一九〇九）に南社を興した陳去病（字は佩忍、号は巢南。呉江の人。一八七四～一九三三）が光緒三十二年四月発行の「国粹学報」第二年第四号（第十六期）に掲載した「五色脂」のなかに、同郷の郭摩に言及して「頻伽の才名、尤も江淮の間に震ふ。其の詩文を靈芬館集と曰ふ。今に至って日本人猶ほ以て宝貴と為す。昔吾が友野口寧齋、嘗て是の書と秋筍集とを以て請を為すも、余卒に未だ以て応ずること有らず。而して寧齋逝けり矣。道遠くして其の墓安く在るかを識らず。予剣を掛けんと欲すと雖も、何ぞ得可けんや」という記述（錢仲聯主編『清詩紀事』十三、嘉慶朝卷「江蘇古籍出版社、一九八九年刊」にも引く）が見え、明治後期に至っ

二 宮 俊 博

ても漢詩壇で郭頻伽詩がもてはやされていたことが窺える。ちなみに、『秋茹集』は、清初の呉兆騫（字は漢槎、一六三一〜一六六四）の集。この人も呉江の出である。〈掛剣〉は、『蒙求』にも見える呉の季札の故事（『史記』呉太伯世家）で、生前の約束を果たすこと。それから、服部擔風を顧問として中京の地で発行された雅堂達致民（辻市治郎）主幹の漢詩雑誌「雅聲」の第百五十九号（昭和九年十月）から第二百二号（昭和十三年五月）にかけて達雅堂の「郭頻伽の事ども」（二）（二五）が掲載されていることも最後に附け加えておく。

【前稿訂正】

拙稿「『逍遙遺稿』札記——シルレルとショオープンハウエルのこと及び張滋昉について」には、次のような誤字脱字や衍字の箇所があったので、茲に訂正しておく。杉下元明、高橋良行、原田憲雄の各氏からそれぞれ御指摘をいただいた。

(誤)

(正)

- 一頁下段九行 ショーペンハーアー↓ショーペンハウアー
- 一三頁下段五行 味ふことなりしが↓味ふこととなりしが
- 二二頁上段八行 北沢乾堂（正誠）↓北沢乾堂（正誠、四十一歳）
- 二六頁下段二二行 〈蕭瑟〉は、疊韻の語で↓〈蕭瑟〉は、双声の語で
- 二七頁上段七行 記しているだが↓記しているのだが
- 二八頁上段十行 言に帰りなんいざ↓言に帰りなんいざ
- 二九頁上段十九行 慨ね錢に吝也↓慨ね錢に吝也
- 二九頁下段十二行 城府をを設けて↓城府を設けて
- 三四頁上段十八行 宮島詠一郎↓宮島誠一郎

(二〇〇三・九・二七初稿)

(二〇〇三・一二・一七補筆)

* 文化情報学部 文化情報学科